

《国民宿舎鵜の岬と伊師浜海岸》



写真1 津波到達点（国民宿舎鵜の岬ロビー前庭）

津波到達点のポイント



写真2 国民宿舎鵜の岬最上階から見た伊師浜海岸

津波の前には、波消しテトラポット（矢印）あたりまで潮が引いた（写真2、3）



写真3

## 4 聞き書き 2 : 震災直後の国民宿舎鶴の岬

収録日 : 2012 年 11 月 9 日

場所 : 国民宿舎鶴の岬

話し手 A : 鶴の岬職員

話し手 B : 話し手 A の知人

聞き手 C : 調査員 (杉本妙子)

C 震災の時のこの辺りの状態だとか、お客様がいらっしゃったりとか、おそらく帰れなくなつて頼つて来られたりとか、そういったご対応の様子を教えてくださいました。

A (3月11日は) 私は出勤をしております、ちょうどあの2時46分でしたか、ちょうどその時間はあと少しでチェックインが始まる時でした。その、チェックインが15時からなので、全体として約4割~5割のお客様が既にご到着なさっていました。あと少しでお部屋に入れますよ、というご案内をしながら、ちょうどその時間、私は事務所の中にいまして、チェックインということで準備をしていました。

実際、地震があつて、これは普通じゃないなというので、とりあえずは放送ができる対応をとらなくてはいけないな、と私個人は思ったのです。まず、地震があつて。地震は結構長かったように思うんですね、その時。ある程度地震が治まってから、それから放送を後輩に指示をいたしました。

その時は、ロビーももうパニック状態でしたので、外に出ている方は外にいて、中で柱の所とかで、なるたけ頭に気をつけながら、そういう方もいらっしゃいました。で、ある程度おさまったところで玄関前にみなさん集合していただきました。

お泊まりのお客様が、約4割5割のお客様がもう到着なさっていて、日帰りの方も4~50名くらいいらっしゃいました。その方たちに、とりあえず、その、まずは一か所に集まっていたいただいて、それから、たまたま消防と警察の方、特に消防の方とは早めに連絡がとれまして、「高台に避難しなさい」という指示をいただきまして。当然、足の悪い方もいらっしゃって、バスを用意しまして、バスに乗っていただいて、鶴来来の湯(うららのゆ)といって、高台のところに日帰りの施設があるんですね。そこに避難しました。

その時に、(鶴来来の湯では) 自家発電が使えること、自家発電ができるということは、照明から、暖房、当時寒かつたということもありましたので、暖房が使える、あとはテレビが見られる、ということで、これは情報が得られるだろうということもあつて、鶴来来の湯に避難をいたしました。

そのうちですね、大概の方は鶴来来の湯の館内のロビーで、テレビで状況を見ていました。わたしは、正直、津波っていうことは頭になかつたです。で、その時に、どっちが先かわかりませんが、テレビで東北の映像が流れたということと、それからこの鶴来来のロビーから伊師浜(いしはま)海岸が望めるんですね。そこがかなり(潮が)引いたんですよ。それで、もう、曇っていたので、余計にそう思ったのですが、海草の色がすごく暗いイメージというか、そういう感じで。こんだけ引いてしまつて、水がなくなっちゃつたら、どうなのかなーということがありました。(写真2・3参照)

たまたま、あのう、当時の鶴来来の湯の職員が、伊師浜がこんだけ引いたことはないから、相当すごい津波が来るんじゃないかというそういう話があつて、これはちょっとあ

の大変なことになるなということ、僕はとにかく状況的に一番高いところという、そこしかないわけで、そこで炊き出しも確保しながら、取りあえずお客様に安心をしていただくと、それが一番あれかな（大切なことかな）と。あと、日立の防災無線が、ロビーかな、ロビーじゃない、事務所の方は聞こえたので、その（防災無線が）入る一報があったら、すぐお客様にお知らせするというので、確か10分から15分おきに入ったかと。それから、男性職員も当時、日帰りのお客様をバスで送ったりとか、あととにかく、男性職員が少なかったんですよ。バスの送迎とかそういうので（いなくて）。テレビもそうですが、防災無線でも情報があつたら全てお客様に流さなければいけないと。

あとはこれは、今となつてはいいか悪いかの話なんでしょうけど、職員二人が（国民宿舎に）残りました。ひょっとしたらまだお客様が来るんじゃないかと。今、思ったら、（津波の）映像見たら、あーよかったなと思うしかないんですが、二人でここに残って、あとから来るお客様の対応をしようというわけで、二人は残ってもらったんです。そしたら、やっぱり案の定、来てまして、そのお客様をすぐに鶴来来の湯に来ていただきました。

そうしているうちに、4時、4時半かな、見てもらえればわかりますけども、夕方暗くなってから、第二波、第三波が過ぎましたということで、防災無線でそういう連絡が入ったのを機に本館（国民宿舎鶴の岬）に移動していただきました。

その時に鶴の岬にお泊まりのお客様と、あのう、日帰りのお客様はやっぱり近くの方だったので、皆さんお帰りになりました。（鶴の岬に宿泊のお客様と）あとは鶴来来の湯のお客様が15名くらいだったでしょうか、その方は足がないということで、こっちに来てくださいということで、総勢100名くらいで鶴の岬に移動しました。そうこうしているうちに、大津波警報からふつうの津波警報になりまして、中央消防署の署長さんがいらっしゃいまして、今のところここ（国民宿舎）なら大丈夫でしょう、と。ここは10メートルあるんですよ、フロントの高さが。ここで待機する分には大丈夫でしょうということで、（消防署長さんから待機許可を）いただきまして、ここで待機をしていましたところ、もう一回大津波警報が出たんですね。それが確か6時半とか6時とかだったかな。その前に、いったん（1階の）大広間まで下りたんです。大広間のお座敷のほうがいいかな、ゆっくりできるでしょうと思って。

C そうですね。横になれますからね。

A そうそうそう。大広間で雑魚寝で皆様に泊まっていたらこうとやったんですが、1時間もしないうちに署長さんがまたいらっしゃいまして、ここ（大広間）では、危ないと。だから、とにかく2階に避難してくれと。それで、（2階の）ロビーに布団を敷いて、そこで雑魚寝をして、炊き出しを行い、結構、余震が続きましたよね。みなさん不安になりながらも、泊まっていたいたんですね。

まあ、ちょっと二人の方が熱を出されまして、そのお客様を介抱しながら、あとのお客様は確かにね、怖いと言いながらも、みんな「大丈夫、大丈夫」と言いながら、過ごしていただいたと。二人のお客様も、翌日には熱もなんとか治まってきて、翌朝、もう一回炊き出しをして、そして、車で来たお客様については、なるだけなんとか（乗り合わせを）お願いできないかということで、近くの方をなんとか、乗せてもらえないかといういろいろお話しさせていただきましたら、やっぱり、あのう、お客様皆さまご協力いただきまして、あとは、あのう、その他のお客様については取手駅まで、私どものほうでバスを出しまして。

C ああ、取手まで行かないと電車が。

A ええ、電車が不通だったもので、取手駅までお送りしたというわけです。確かその日

の 11 時ごろ出まして、帰ってきたのが夜中の 11 時頃かそんな時間だったと思います。それから、鶺鴒のお客様も朝早く、6 時 50 分くらいだったかと思うんですが、ご家族の方がお迎えに来てくださいました。

C よくご家族の方と連絡つきましたね。

A そうですね、確か、えーと、鶺鴒の岬の電話が、確か途中からつながり始まったんですよ。停電だったでしょう？（C ええ）うちの場合、回線が 1 回線だけ使えるようになっているんですね。それがあって、お迎えにいらっしゃったんですね。

C でも、停電でも 1 回線だけ使えたっていうのは、すごくその時、いろんな連絡ができて（助かったでしょうね）。

A それがですね、使えたり使えなかったりなんですよ。私も他の職員も、うちに帰れる状態じゃなかったの、とにかくあの、家族の安否だとか、そういうのの確認ですね。だいたいもう、近くの方は逆にここよりは久慈浜ですとか大津とか、あの辺のほうはすごいという情報があって、ほとんどの人はここに泊まったというわけです。よっぽど近くのパートさんとかは帰ってもらい てもらいましたけど、寮生活している職員もいますので（ここに宿泊することは、問題なかった）。ただ、連絡が翌日担っちゃったとか、私も翌日の夕方かな、やっと家族と連絡が取れたんですが。

C 携帯電話もつながらなかったですからね。

A ええ。あとは、翌日、やっぱりこれも聞いた話ですけどもガソリンスタンドが渋滞しちゃって、それで帰るどこじゃないって。そうですね、水戸まで行くととなるとガソリンもかかるし。それに実際、やっぱり久慈川から北の方は 2 日ぐらい遅れたんです、ガソリンも。話を聞くと、鶺鴒の岬の中には水戸から来ている者もいますしね、水戸だったらガソリンのこと考えたら泊まっちゃったほうがいいよねって。私も何日か泊まりました。そういう感じで、あとの処理というか、お客様はもうお帰りになってますし、そのあと、何をしなくちゃいけないかっていう、後処理が大変だったというのが記憶にありますね。

C このあたりは停電はどれくらい続いたんですか？

A この辺は、日立では遅かったように思います。1 週間ぐらいだったかな。

C B さんのご自宅のあたりはどうでしたか。

B いやいや、2・3 日、1 日じゃなかった。水道は、けっこう長かった。

C そうですね。日立は水道が（復旧まで）長かったですよね。

A 水なんです、水。

B 日立の場合は、水道管なんか破裂しちゃったということはなかったんですね。でも、それがなくても遅かった。

A 水はそうですね、うちのほうも遅かったですね、鶺鴒の岬のほうは。

A 電気のほうが早かったですよね。

B そうですね

A まあ、でもほんとに今思うと、こういうこと言っちゃあれですけど、我々もやっぱり葛藤があったんですね。お客様もこんなにすごい地震だと思ってなくて、私たちもそう思ってなくて。

C ええ、そうですね。

A いろいろやっぱり言われたのが、車のとこ行きたいんだけどって。今だったら絶対、行かないでくださいって言いますよね、絶対。ところが、あの時はやっぱり車取りに行きたいんだけどって、必ず言われました。あとは、貴重品。あのう、放送の中でね、貴重品持って避難してくださいっていう話をしましたけど、「あれっ、忘れちゃった」って。

C 取りに戻って行かれて。

- A 東北の、ああいう状況を見たら、戻ってきた方が（津波に）さらわれちゃったとか聞きますと、あー、そういう状況にならなくてよかったなって思いますね。結構ありました。あの、車。それでもし、万が一そういう状況を私たちが知ってて、もうとにかく命が大事ですから車は諦めてくださいとは言えないですけど、とにかく動かないほうがいいですよ、動かないほうがいいですよって。「じゃあ、あんた車保証してくれんのか？」って言われた時に、今だったらどうだったのかと、非常に思います。まあ、現状を思えば、私もわかってるし、お客様もそういう状況をわかっているから、今思えばそういうことは言って来ないと思いますけど、あの当時、あの状況の中で行かせちゃってたら、おそらく死人が出てたんじゃないかと。
- C そうですね、車もだいぶバウンドしてたと思いますし、乗ろうとして自分の車にぶつかったりとか。
- A 今まで、当然今まで、火災訓練は何回もやってきましたけど、津波の訓練はおそらく 1 回もやったところがないと思うんですよ。そういう時に課題はなんなのかと言われたときに、やっぱり私以外でもお客様に対応してた者は、やっぱり一人ひとり言われてたと思います。あー、その時、行かせなくてよかったなって。
- C その時こちらでは、まずは行かずにここで止まってくださいっていうご対応をされてたんですね。
- A ええ、しました。  
あの映像見てからのの方が結構多かった気がしますね。こっちも来るんじゃないかっていう恐怖ですね。ましてや、あーでも一組かな。一組、客室に置いてきたっていう方がいらっしやいました。係の者をつけさせて行かせました。車はさすがにいませんでしたけど、一組いました。その時に、ここに二人、責任あるものが残ってましたので、ちょうどトランシーバーありましたので、それで連絡取り合いながら。あー、でも、ああいう津波が来なくてよかったって今思えば思いますね。
- C そうですね、この場所がもっと東北のほうにあつたら、かなり水もかぶってかなり被害もあったらと思うますね。
- A ええ、そうですね。よくホテルっていうので映ったのが、陸前高田にキャピタルホテルとあって、あのを、松原があるところの近くにあるんですね、なんか高い。そこなんかを見てますと、そこなんか見ても、高台じゃないんですね。そこどうも海が近いんで、あーいうのが来ちゃった時には建屋なんかも何階だったら大丈夫なのかとか、急に来た場合ですね。中には 30 メートル以上の津波ですとかね、あったみたいですからね。実際、  
訓練をする前に、みんなで集まって、どこに避難すれば一番最良かっていうことを言いましたらば、国土地理院の地図で（この近くに）高台があります。そこで 30 メートル強あるんですよ。で、とにかく逃げられる所で、あんまり遠いところでは逃げられないし、とにかく車で逃げるっていうのは難しいだろうと。どうしても車が数珠つなぎになって、車で避難するっていうのは、ちょっと厳しいよと、報道なんかでもされてたみたいですね。
- C そうですね、車で避難しようとして波にのまれたとか。
- A そうですね、とにかく歩くかおんぶするかと、そういう状況の中で避難するとしたら、その高台ぐらいしかない。だから、最良の方法でということで、まあ当時は鶴来来の湯だったんですけど、そこより高い広場のほうにしようということで、移動したんですね。すでに津波の誘導と、火事の避難誘導と、必ず（避難訓練を）やるときには二パターン入れまして、今、訓練の時に入れてやっています。
- C その高台のところ、30 メートルの高台のところまで歩いていくと、どのくらいで？

- A えー、そうですね、歩いてですね、やっぱり早歩きでほしい 60 代くらいの方で 5 分から 6 分くらいかな。直線距離にすると 600 メートルか 500 メートルかな。ただやっぱり坂になってるのでね、まあ 10 分以内には間違いなく行けるかと。
- C そうですね。そういった避難の時には、どこに逃げるかということを取り入れたというのが、(震災の) その後の改善ということなんですね。
- A そうですね、改善と。あとはまず持ち物のこと。
- C まず命と。それから誘導の仕方ですよ。
- A はい。火事の際は、そこが火事になってたら、まずは煙を吸わないこと。それからいち早く避難をすることなんだけど、やっぱり津波の場合は、焦らず、やっぱりそれで足をくじっちゃって登れなくなっちゃったとか、そういうのじゃなくて、焦らずに高台に避難することということで、明確化してきたように思うんですね。ですからその、誘導する際にも、例えば我々職員が遅番とかありますから、職員が常に遅番、早番で泊まってるわけですね。そういう者も火事の場合ですと助けを呼べるんですね。ところが、津波の場合はいち早くお客様を避難・誘導しつつも、自分も命を守りながら避難しなくちゃならないから、本当にどちらかということと火事よりもマニュアルづくりは大変だったように思います。
- C そういったマニュアルは公開してないんですか？
- A 公開はしていないんですけど、消防が月 2 回、消防の方に来ていただいて、訓練しておかないと。場合によっては場所的なことも、我々従業員だったらすぐわかることも、消防の方がいきなり来てどうかっていうと、やっぱり一回立ち会っていただいて、ということが大切ですね。
- C 他の宿泊施設と情報交換はされてますか？
- A 現在は震災当時は例えば被害状況とか、なかなかうちも余裕がなかったのですが、そういう中で、他の施設を参考にさせてもらったりというのはあります。特に私共の場合は、いこいの村酒沼という姉妹施設がありまして、酒沼となるだけ情報共有しながら、うちの場合はこういうのが問題だからこういうふうにしようかって。いこいの村酒沼は酒沼って湖があって、そこで高台があるかっていうとうちよりも無いので、
- C そうですよ。あのあたりも震災で酒沼の近くの川は川底まで見えたとか。
- A 課題は違っても、避難誘導の仕方とかは参考になりました。
- C 震災の時はこちらはいろんなことが、いい方向にいい方向に対応できたようですね。
- A そうですね。余裕はなかったですけど、なんとか臨機応変に対応できたっていう。まあ何もなかったから言えるんですが。それから、たまたま消防の宿泊施設だったということで、消防さんのほうでも気遣ってくれたのが大きかったかなっていうのはあります。
- C 津波の時にどのあたりまで波が引いたっていうのは記憶にありますか？
- A 実は、鵜来来の湯にいたので、こちら(鵜の岬)のことはわからないのですが、(波消しの)テトラポットがあるんですね、そこより引いたんです。そこってどこらへんかというとおそらく(海岸から)100 メートルくらいあるんじゃないかな。(写真 2、3 参照) ちょうど曇りで暗い感じがしたんですよね。なおかつ、海草の色が黒っぽかったので、暗黒の世界みたいな感じでした。
- C そうですよ、普段観ることのない海底ですもんね。
- 今日も先ほど地震があつて、ちょうど Bさんと食事をしてた時だったんですが。館内の放送があつて。
- A そうですね、揺れましたね。
- C このあたりは震度 3 くらいですか。
- A (震度) 4 でしたね。

- C (あまり揺れを感じなかったの) じゃあ建物がかなりしっかりしているんですね。
- A そうですね。私はちょうど立ってお客様の対応をしていたもので、あまり気付かなかったんですが、まずはテレビつけて。とりあえず(情報は)一番はNHKなんですよ。消防の無線よりもNHKのほうが速いんですよ。去年の震災の時も、鶴来来の湯に移動していなかったら、本当にパニックになっていたと思います。お客様も、(鶴来来の湯でテレビを)じーっと見てましたからね。普通だったら、どういう状況かわからなかったら不安で不安で泣いちゃったりとか、そういう方もいらっしゃると思うけれども、テレビが見られて、関東が今、まだ映ってないっていうことは、大丈夫なのかなという感じで。
- C リアルタイムで東北の津波の様子が、こう繰り返し繰り返しでしたもんね。
- A ええ、ええ。そうですね、とにかく、この地区がどうなっているのかっていうことは、(お客様に)お話してあげないと思って、男性職員もほんとに数えるほどだったんですよ。とにかく、もう情報だ情報だと言って、事務所に必ず誰か待機させて、無線があつたら必ずメモとって知らせてくれて。お客さんとお話ししながら、お客さんに大丈夫ですよ、大丈夫ですよって言ってましたね。
- C あの、いろんなところからお客さんもいらっしゃると思うんですが、Aさんは標準語しゃべってらっしゃるので、皆さんはAさんのことばは全然問題ないと思うんですが、お客さんの中でことばの面で、何かご不自由なさったようなことは、ありましたでしょうか。
- A ことばの面、知らないうちにしゃべってましたよね、お客様と。あとば、私共の女性職員が20代の若い職員が多いんですが、女性職員がお客様に勇気づけられたのかなあ、という感じがしますね。自分の娘だとか孫だとかいう年代だと思うんですけど、いろいろ話しかけていただいたりとかで、なにげなく過ごせたというか。すごく待ってる時間て長いように、3時くらいから結構な時間いたにもかかわらず、結構短かった気がしますね。
- C 経験があれば頭も回るかもしれないですが、まったく予想外の時にお互いに声掛けあって乗り切れたっていうのが。
- A お客様も、いろいろないいことが重なったっていう。寒さをしのげたっていうのもそうですね。お風呂に入っていて、気が付いたら風邪ひいてたっていう方もいましたけど。
- C 見事なご対応でしたね。でも、やっぱり声掛けあうっていうのが大事ですよ。
- A そうですね。でもそうせざるをえなかったって、今思いますとね。
- C お立場から、そうしなくちゃいけないっていうのもあったでしょうが。
- A ええ、でも、お客さんから逆に気を遣っていただいちゃって。こっちはいいから、あっち行ってきな、なんて。向こうに避難した時に、こっちは分かったから、ひとりでやるから大丈夫だよ。向こう行っていいなんて。
- C こっちに残られた職員の方も、心臓ドキドキだったでしょうね。
- A おそらく。でもテレビ観てなかったから。
- C ああ、情報がある怖さっていうのもあったかもしれませぬ。
- A こういう状況の中で、お客様が来られたんですよ。途中から消防が車で「海の方に行かないで下さいって」回ってて、それからはなかったと思いますが。それまでに、10人くらいのお客さんが来られたんですよ。
- C まさか大きな津波がやってきてるって思わないですもんね。
- A こっちに戻って来てからも、情報源がある強さっていうのは。

C 安心は安心ですよ。

1時間近くお話いただきまして、お忙しい中ありがとうございます。

今日お話しいただいたことの一部分を、聞き書きのような形で公開させていただくこと  
になろうかと思えます。